

https://en.wikipedia.org/wiki/Land_Day

より

土地の日

18 言語

フリー百科事典『ウィキペディア』より

土地の日



土地の日ポスター、アベド・アベド・エル・ハミード作、1985 年

観察者 [イスラエル](#)と[パレスチナ占領地](#)のパレスチナ人

日付 [3 月 30 日](#)

次回 2025 年 3 月 30 日

頻度 年間

土地の日([アラビア語](#): يَوْمُ الْأَرْضِ、[ローマ字](#): Yawm al-'Ard; [ヘブライ語](#): יוֹם הָאֲדָמָה、[ローマ字](#): Yom HaAdama) は 3 月 30 日に繰り返され、[パレスチナ人](#)は、[イスラエルのアラブ国民](#)であり、1976 年にイスラエルで起きた出来事の当時の [イスラエル占領地域](#)の人々でもあります。

1976 年、[イスラエル政府は、サフニンとアラバ](#)のアラブ人村落間の約 2 万 [ドゥナム](#) (20 km²、7.7 平方マイル) の土地を国家目的に没収する計画を発表した。そのうち 6,300 ドゥナム (6.3 km²、2.4 平方マイル) はアラブ人所有だった。^[1]これは、[ガリラヤのユダヤ化](#)を狙ったイスラエル政府の戦略の一部を形成した。これに応じて、[アラブ人の町はゼネスト宣言し、ガリラヤからネゲブ](#)までデモ行進が組織された。^{[2][3]}イスラエル [軍](#)と警察は、半数が女性だった非武装のアラブ人デモ参加者 6 人を殺害し、^[4] 100

人以上を負傷させ、その他数百人を逮捕した。[\[3\]](#)[\[5\]](#)[\[6\]](#)[\[7\]](#)

[イスラエル・パレスチナ紛争](#)に関する研究では、土地の争いが土地をめぐる闘争とアラブ市民とイスラエル国家および[政治体制](#)との関係において極めて重要な出来事であると認識されている。[\[8\]](#)[イスラエルのアラブ人がパレスチナの国民](#)集団としてイスラエルの政策に反応したのは 1948 年以來初めてであるという点で重要である。[\[2\]](#)それ以来、パレスチナの家政治暦における重要な年次記念日であり、イスラエルのアラブ市民だけでなく、[世界中の](#)パレスチナ人によっても祝われている。[\[9\]](#)

背景

参照:[アラブ・イスラエル紛争](#)および[イスラエル・パレスチナ紛争](#)



[エルサレム](#)と[ベツレヘム](#)の間にある[バティール](#)村のアラブ人農民女

性（[フェラハット](#)）が市場に農産物を運んでいる（1910 年）

[パレスチナ委任統治領](#)の[アラブ人](#)は主に[農耕民族](#)であり、[イスラエル国家の樹立](#)以前はその約 4 分の 3 が土地で生計を立てていた。[\[10\]](#)[\[11\]](#)[\[12\]](#)[\[13\]](#) [1948 年のパレスチナ戦争](#)中の[パレスチナ人の追放と逃亡](#)の後も、土地はイスラエル国家となった地域に残った 15 万 6000 人の[パレスチナ人アラブ人](#)の生活において重要な役割を果たし続け、共同体のアイデンティティ、名誉、目的の源泉となった。[\[10\]](#)[\[14\]](#)

イスラエル政府は 1950 年に[帰還法](#)を採択し、[ユダヤ人のイスラエルへの移住とユダヤ人難民](#)の吸収を促進した。1950 年 3 月のイスラエルの[不在者財産法](#)は、不在所有者の財産権を政府が任命した不在者財産管理人に移譲した。この法律はまた、「国内に居住しているが、法律上は『不在』と分類されている」イスラエルのアラブ系市民の土地を没収するためにも使用された。[\[15\]](#)[イスラエルのアラブ系市民 120 万人のうち、「現在不在」](#)または[国内避難民](#)のパレスチナ人の数は（2001 年）20 万人と推定され、イスラエルのパレスチナ系アラブ人人口全体の約 17% を占める。[\[15\]](#) [サルマン・アブ・シッタ](#)は、1948 年から 2003 年の間に、イスラエルのアラブ系市民（在留者を含む）から 1,000 平方キロメートル（390 平方マイル）以上の土地が没収されたと推定している。[\[16\]](#)

[オレン・イフタヘル](#)によれば、1970 年代半ばまでは、イスラエルのアラブ人の間で国家の政策や慣行に対する公的な抗議はまれだった。その理由は、彼らの居住地に対する[軍政](#)、貧困、孤立、分断、そしてイスラエル新国家における彼らの周辺的立場など、さまざまな要因が重なったためである。[\[17\]](#)土地収用や軍政（1948～1966 年）下でアラブ市民が受けた制限に反対して実際に行われた抗議は、シャニー・ペイズによれば、移動、表現、集会の自由に対する当時の特徴的な権利制限のため、「散発的」かつ「限定的」であった。[\[18\]](#)政治運動[アル・アルド](#)（「土地」）は約 10 年間活動していたが、1964 年に違法と宣言され、それ以外の最も有名な反政府運動は、[共産党](#)が毎年開催する[メーデー](#)抗議であった。[\[17\]](#)

触媒となるイベント



北限に続く道路から見たアラバの眺め

イスラエル政府は、[ガリラヤ地方](#)の土地を公的使用のために[収用する意向を表明し](#)、[サフニン](#)と[アラバ](#)のアラブ人村落間の約2万[ドゥナム](#)の土地のうち6,300ドゥナムはアラブ人所有であった。^[1]1976年3月11日、政府は収用計画を発表した。^[19]

イフタヘルは、ガリラヤ北部の土地[没収とユダヤ人入植地の拡大は、ガリラヤのユダヤ化](#)を狙った政府の継続的な戦略の一部であり、それ自体が「パレスチナ人の抵抗」への反応と触媒の両方となり、土地の日の出来事で頂点に達したと書いている。^[20][パレスチナ解放民主戦線](#)（DFLP）の指導者[ナエフ・ハワトメ](#)によると、その土地は「1975年のいわゆるガリラヤ開発計画の実施において、8つのユダヤ人工業村を建設するために使用されることになっていた。この計画を歓迎する農業省は、その主な目的はガリラヤの人口動態を変えて、その地域にユダヤ人の多数派を作ることであると公然と宣言した。」^{[4][21]}[エルサレムポスト](#)のオルリー・ヘルパーンは、これらの土地は安全保障上の理由から政府によって没収され、その後軍事訓練キャンプや新たなユダヤ人入植地の建設に使用されたと書いている。^[4]

イファト・ホルツマン＝ガジットは、1976年の発表を、1975年に考案されたより大規模な計画の枠組みの中に位置づけている。[カルミエル](#)のユダヤ人街を拡張するため、約1,900ドゥナムのアラブ人私有地が収用されることになっていた。さらに、この計画では、1977年から1981年の間に、[ミツピム](#)（単数形：ミツペ）と呼ばれる、それぞれ20世帯未満からなる50の新しいユダヤ人入植地を設立することが想定されていた。計画では、これらの入植地をガリラヤ中央部のアラブ人村落群の間に位置させることになっており、約2万ドゥナムの土地が影響を受けることになっていた（このうち30%はアラブ人から、15%はユダヤ人から収用され、残りは国有地となる）。^[22]デイビッド・マクドウォールは、1970年代半ばのガリラヤでの土地収用の再開と[ヨルダン川西岸](#)での土地収用の加速が、土地の日デモと同時期にヨルダン川西岸で起こっていた同様のデモの直接的なきっかけであったと指摘している。彼は次のように書いている。「土地問題以上に、2つのパレスチナ人コミュニティを政治的に結びつけるものはなかった。」^[23]

1976年の抗議

政府による土地没収の決定には、1976年3月29日午後5時から、サクニン、アラバ、[デイル・ハンナ](#)、[トゥルアン](#)、[タムラ](#)、[カブールの各村に課される夜間外出禁止令の宣言が伴った](#)。^[4][ナザレ](#)市長も務めた[タウフィク・ジアド](#)など、[ラカ](#)党の地元アラブ指導者たちは、3月30日に土地没収に反対する[ゼネスト](#)と抗議の日を行うよう呼びかけてこれに応えた。^[24]3月18日、[労働党](#)員である地元アラブ評議会の長らが[シェファ・アムル](#)で会合し、行動日の支持に反対票を投じた。決定のニュースが公になると、市庁舎の外ではデモが起こり、催涙ガスで解散させられた。^[25]政府はすべてのデモを違法と宣言し、生徒に参加を勧めた教師などの「扇動者」を解雇すると脅した。^[26]しかし、脅しは効果がなく、多くの教師が

生徒を教室から連れ出し、北はガリラヤから南はネゲブまでイスラエルのアラブの町々で行われたゼネストやデモ行進に参加した。^{[21][4][26]}連帯ストライキはヨルダン川西岸、ガザ地区、レバノンのパレスチナ難民キャンプのほとんどでもほぼ同時に行われた。^[27]

この日の出来事は前例のないものだった。^[26]国際ユダヤ人平和連合によると、「土地の日にイスラエル国内で事件が起きるのを未然に防ぐため、ヘリコプターに搭乗した戦術部隊と陸軍部隊を含む約4,000人の警官がガリラヤに配備された[...]」^[28]抗議活動中、非武装のデモ参加者4人がイスラエル国防軍(IDF)に射殺され、さらに2人が警察に射殺された。^[4]ナフラ・アブドとロニット・レンティンは、死者のうち3人は女性で、「軍はガリラヤのさまざまな村の舗装されていない道路に沿って装甲車や戦車を走らせることを許可された」と書いている。^[26]約100人のアラブ人が負傷し、数百人が逮捕された。^{[5][6]}ニューヨーク・タイムズ紙は、この殺害は「イスラエルによるアラブ人の土地の収用に対する抗議としてガリラヤ地方で起きた暴動」の最中に警察によって行われたと報じた。^[29]エズラ・ハレヴィは『アルツ・シェヴァ』の中で、暴動は前夜に始まり、「イスラエルのアラブ人が警察と兵士に石や火炎瓶を投げつけた。暴動は翌日も続き激化し、イスラエル治安部隊のメンバーの多くが負傷し、暴徒化したアラブ人6人が死亡した」と書いている。^[30]エルサレム・ポスト紙のヨセフ・ゴエルは、「死者を出した暴動の本当のきっかけは、サフニン、アラブ、デイル・ハンナの村々の道路を走行していた、何も知らないイスラエル国防軍の車列に対する、激怒した何百人ものアラブ人の若者による無差別攻撃だった。イスラエルのガリラヤ地方の中心部にイスラエル軍部隊がいることを挑発行為と見なさない限り、イスラエル国防軍の車列による事前の挑発行為はなかった」と書いている。^[31]

2003年のイスラエル政府の文書には、「アラブの著名人は抗議活動を抑制しようとしたが、事態を制御できなくなった。抗議者たちはタイヤを燃やし、道路を封鎖し、石や火炎瓶を投げた」と記されている。6人の死者を抗議者と治安部隊の「激しい衝突」の文脈に位置づけ、双方に多数の負傷者が出たことも指摘されている。^[32]バルーク・キマーリングとジョエル・S・ミグダルは、土地の日がカフル・カシム虐殺と異なるのは、イスラエルのパレスチナ人が「[...] 1956年には全く欠けていた大胆な自信と政治意識を示したこと、この時のアラブ市民は受動的で従順ではなかったこと、代わりに国家レベルで政治活動を開始し、調整し、警察の暴力に自らの暴力で応じた」と書いている。^[33]

インパクト

土地の日のイベント中、イスラエルのアラブ人コミュニティの間では、国家と警察に対する怒り、そして死亡した抗議者に対する悲しみとともに、新たな国家的誇りの意識が生まれた。^[33]アラブ系政党ラカとアブナ・アル・バラドの間で分裂が勃発した。イスラエル・パレスチナ紛争の二国家解決に尽力するラカは、ヨルダン川西岸のパレスチナ人の関与に大きな留保を抱いていた。対照的に、アブナ・アル・バラドは、単一の民主的なパレスチナの樹立に尽力し、土地、平等、難民、占領の問題を「包括的で一体かつ不可分な全体」と見なしていた。^[23]ラカは二国家解決に尽力し続けたものの、コミュニティの感情にもっと沿うように、パレスチナ人のアイデンティティをより明確に表現するという微妙なバランスをとった。例えば、土地の日の直後、タウフィク・ジアードは「これからはコミュニティや宗教グループは存在せず、パレスチナ国家の一部である単一のアラブ少数派だけが存在するだろう」と宣言した。^[23]



上ナザレにある[イツハク・ラビン](#)にちなんで名付けられた政府施設

[土地の日はまた、アラブ人がイスラエルの政治](#)において存在感を高め、もはや無視できない存在となった。イスラエルのアラブ市民社会は互いに連携を深め、土地と計画政策、社会経済的状況、パレスチナ人の国民的権利という 3 つの主要問題に焦点を当てた政府の政策に対する抗議活動がより頻繁に行われるようになった。^[17]

抗議運動は、1975 年の土地収用計画を阻止するのにほとんど役立たなかった。設立された ミツピム の数は、1981 年には 26、1988 年には 52 に達した。これらの ミツピム と、[アッパー ナザレ](#)、[マアロット](#)、[ミグダル ハエメク](#)、[カルミエル](#) の「開発都市」は、ガリラヤの人口構成を大きく変えた。イスラエル建国後の数年間、ガリラヤの人口の 92% をアラブ人が占めていたが、1994 年までに、その数は 680,000 人の地域人口のうち 72% に減少し、ユダヤ人が残りの 28% を占めるようになった。ガリラヤでの大規模な土地収用は、1980 年代以降、イスラエル政府によって一般的に避けられてきた。^[22]

イスラエルのメディア報道に関する研究

イスラエルの [メディアによる](#) 土地の日に関する報道は、イスラエルの学者によって分析され、批判されてきた。アリナ・コーレンが 1994 年に [イスラエルの主要 7 紙](#) を対象に行った調査では、土地の日の準備と結果に関する報道は 1976 年 3 月から 4 月にかけて広範囲に及んだが、その報道は、大臣、顧問、または「アラブ人の専門家」などの公式イスラエル情報源の声明にほぼ全面的に依存していた。アラブの主催者や参加者の声にはほとんどスペースが割かれていなかった。調査した新聞はすべて、イデオロギーの違いにかかわらず、原因を軽視し、代わりに 2 つの主なテーマを強調した。つまり、デモを少数派の非代表的行為として描写し、国家の安全保障と法と秩序に対する潜在的な脅威として描写した。ダニエル・バータルとヨナ・テイクマンは次のように書いている。「特に重要なのは、すべての新聞が参加者を共産主義者、[国家主義者](#)、[過激派](#)、扇動者、扇動者、敵、暴力的な人々として非合法化したという発見である。」^[34]

バータルとタイヒマンはまた、ガディ・ウォルフスフェルド、イーライ・アブラハム、イッサム・アブラヤの各教授による 2000 年の研究を引用している。この研究では、1977 年から 1997 年までの毎年の記念行事に関する [ハアレツ紙](#) と [イエディオット・アハロノト](#) の報道を分析し、毎年の行事前の報道も警察や軍の情報源からのニュース記事に大きく依存していることを発見した。焦点は安全対策にあり、アラブ人に関する報道は彼らの指導者による煽動と扇動に限られていた。抗議行動の理由に関する情報は、掲載された記事の 6% から 7% で提供されていた。記者のほとんどはユダヤ人であり、ハアレツ紙だけがアラブ人住民を取材する特別記者を抱えていた。この行事は [アラブ・イスラエル紛争](#) の文脈の中で位置づけられ、アラブ人のデモ参加者は政府に要求する市民ではなく敵と定義された。例えば、1997 年 3 月 22 日の [イエディオット・アハロノス紙](#) の社説にはこう書かれている。「抗議する権利には、暴動を起こす権

利、道路を封鎖する権利、通行中の車両に石を投げる権利は含まれない。…イスラエルのアラブ人に対して、彼らのイスラエル人としてのアイデンティティの大部分は、彼らの国とその法律に対する忠誠心に基づいていることを再度明確にする必要がある。彼らがこれらの法律を望まないのであれば、誰も彼らの国外脱出を阻止することはできない。」^[34]

遺産



土地の日ポスター（1984年）アブデル・ラーマン・アル・ムザイン

パレスチナ人にとって、土地の日はそれ以来、土地とアイデンティティを守る闘いで亡くなった人々を追悼し、讃える日となっている。[イスラエルのアラブ系市民](#)にとって、特に平等な土地と市民権の問題をめぐる政治的不満を表明する日となることが多いが、1988年に彼らは、土地の日は「毎年のデモとゼネストで特徴づけられる、パレスチナ人とイスラエル人の国民的記念日、およびヨルダン川西岸とガザ地区のパレスチナ人との一体感の日」となるべきであると宣言した。^{[4][33]}

土地記念日は、イスラエルのアラブ系市民の政治的連帯を築くだけでなく、「1948年のアラブ人」をより広いパレスチナ世界と主流のパレスチナ民族主義の中心に再び受け入れることを固めることにも役立った」。^{[33][8]}この日は、ヨルダン川[西岸](#)、[ガザ地区](#)、[東エルサレム](#)、さらには[難民キャンプ](#)や世界中の[パレスチナ人ディアスポラに住むパレスチナ人によって毎年記念されている](#)。^[21]2007年、[パレスチナ自治政府](#)のプレスセンターは、この日を「パレスチナ人が祖先の土地、アイデンティティ、存在を受け入れる特別な日であり、パレスチナ人の闘争の歴史において注目すべき日である」と表現した。^[35]しかし近年、主催者が大々的に宣伝しているにもかかわらず、イスラエル国内のアラブ系住民は抗議活動にそれほど熱心ではないようだとの多くの観察者が指摘している。多くの人はこれを草の根レベルでの和解が進んでいる兆候だと見ている。^[36]

毎年の追悼と抗議



[ガザ地区](#)ベイト・ハヌーンでの土地の日集会に参加したパレスチナ人

女性と子ども

主要記事:[帰還行進 \(イスラエル\)](#)

[イスラエル司法当局](#)の調査によると、2000 年の年次記念行事中にイスラエルで行われたゼネストやデモは、[サフニン](#)での抗議行動を除いて、おおむね平和的に行われたという。サフニンでは、何百人もの若者が集まり、村の西側に隣接する[イスラエル軍基地に向かって移動した。彼らはフェンスを根こそぎ引き抜いて基地に侵入し、中でパレスチナ国旗](#)を振った。演説をするためにそこにいたアラブの著名人が彼らを制圧しようとしたが、敵意を向けられ、殴打されることもあった。基地の増援のために到着した[国境警備隊は](#)、マスクを着けて森に火を放つデモ参加者らから石を投げつけられた。[催涙ガス](#)や[ゴム弾](#)が使用され、デモ参加者は衝突が続く幹線道路へと押し戻された。アラブ高等フォローアップ委員会の委員長であるムハンマド・ジダン氏は衝突で負傷した人々の一人であり、サフニン出身の 72 歳の女性は催涙ガスを吸い込んで負傷し、病院で死亡したと報告されている。[\[32\]エルサレム・ポスト紙](#)の 2006 年の報道によると、今日アラブ市民がこの日を毎年記念する中、イスラエルの治安部隊は警戒を怠らないものの、抗議活動には介入していないという。[\[4\]](#)

[2001 年の第二次インティファダ](#)では、土地の日 25 周年の記念日である金曜日、毎週の「怒りの日」に、パレスチナ人がデモを行うよう呼びかけられた。[\[37\]](#)数万人のアラブ市民が、一部のユダヤ人とともに、パレスチナ国旗を掲げてイスラエル国内で平和的なデモを行った。[\[37\]](#)ヨルダン川西岸でのデモ中、石や火炎瓶を投げるデモ参加者に対しイスラエル軍が実弾を使用し、[ナブルスでパレスチナ人 4 人が死亡、36 人が負傷した](#)。[\[37\]](#)ラマラでは、[アリエル・シャロン](#)の写真を燃やし、[イラク](#)とパレスチナの国旗を振った 2,000 人のデモ参加者と兵士が衝突し、パレスチナ人 1 人が射殺され、11 人が負傷した。1 時間後にはパレスチナの武装勢力も衝突に加わり、戦車に搭載された機関銃によるイスラエル軍の激しい射撃を受けた。[\[37\]](#)[ガザ地区やレバノンのアイン・アル・ヒルウェ](#)にあるパレスチナ難民キャンプでもデモが行われた。[\[37\]](#)



パレスチナの映画監督兼芸術家[ヒシャム・ズレイク](#)は、[ドイツのドルトムントで行われたパレスチナの土地の日の祝賀会](#)で、[セバスティア・テオドシオス](#)大司教（アタラ・ハンナ）とパレスチナの歌手[マナル・ムーサ](#)にそれぞれ自分の作品を贈呈し、敬意を表した。

2002 年の土地の日のデモでは、イスラエルのアラブ系市民がヨルダン川西岸地区とガザ地区のパレスチナ人との連帯を表明し、「パレスチナ指導者[ヤセル・アラファト](#)氏の[本部](#)に対するイスラエルの包囲」に反対の声を上げた。[\[38\]](#) 2005 年の土地の日の記念行事は、[ネゲブ地方の未承認の村々](#)の窮状に捧げられた。主催者によれば、そこでは 8 万人のアラブ系市民が基本的なアメニティを利用できない状態で暮らしており、3 万軒の家屋が[取り壊し命令](#)を受けているという。[\[39\]](#) 2008 年のデモ行進には[ヤッファ](#)で組織されたものも含まれ、1,000 人のアラブ系市民が土地の日の記念行事を利用して、同市での土地没収が

加速しているとされる状況に注意を喚起した。多くの人々が、国外から来たユダヤ人を自分たちの場所に定住させるために強制的に家を追い出され、取り壊し命令に直面していると不満を漏らした。^[40]

土地の日には、進行中の土地収用に対する抗議として[非暴力抵抗](#)行動を開始するよう呼びかける声が定期的に上がっている。例えば、パレスチナ居住・難民権利のための BADIL リソースセンターは、2006 年の土地の日にプレスリリースを発表し、「イスラエルに対する[ボイコット、投資撤退、制裁](#)と「[人種差別、占領、植民地化](#)」の終結を求めた。^[41] 2009 年の土地の日の記念式典では、マルセル・クリフィと数人の国際歌手による[パレスチナ民族主義](#)の歌を歌う 50 人のパレスチナ人女性のグループが、[エルサレム旧市街のダマスカス門](#)に集まり、イスラエル製品のボイコットを呼び掛けるポスターや T シャツを配った。^[42]

また 2009 年には、パレスチナ国旗を掲げる者もいた数千人のアラブ市民が、「我々はイスラエルのファシズムと人種差別主義の下で団結している」という旗を掲げて[アラブとサフニンの町を行進した](#)。[アラブ系クネセト](#)議員[タラブ・エル・サナ](#)は政府に対し、「[ガリラヤ](#)とネゲブをユダヤ化する人種差別的計画を中止し、ガリラヤとネゲブの住民全員のための開発政策を採用する」よう求めた。^[43] [Ynet](#) は、パレスチナ人による抗議行動が米国、カナダ、ドイツ、フィンランド、フランス、ベルギーを含む世界各地で計画され、[世界社会フォーラム](#) (WSF) はすべての加盟組織にイスラエルを破門するよう求めるキャンペーンの開始を発表したと報じた。土地の日はまた、[サブラとシャティーラ難民キャンプ](#)でも美術展や音楽イベントを通じて記念され、[パレスチナ自治区でもパレスチナ人がナアリンとジャユースのイスラエル西岸壁](#)付近でデモを行い石を投げた。^{[43][44]}

イスラエルは 2012 年の土地の日抗議運動を見越して、[ヨルダン川西岸地区を封鎖した](#)（ただし、この制限は[イスラエル人入植者](#)には適用されなかった）。^[45] 抗議運動はガザ地区とヨルダン川西岸地区で開催された。ガザ地区では、イスラエル軍が警備フェンスを越えようとした抗議者に発砲し、1 人が死亡、37 人が負傷した。^[46] [カランディア](#)検問所では、石を投げるパレスチナの若者と、ゴム弾やスタングレネードを発射するイスラエル兵が衝突し、39 人のパレスチナ人が負傷した。^[47] [ヨルダン](#)では、パレスチナ人を含む 1 万 5000 人が平和的な[座り込み](#)に参加した。パレスチナ難民も[レバノンのボーフォート城](#)近くでデモを行った。^[47]

[2018 年の土地の日の抗議活動](#)では、ハマスのメンバー 5 人を含む 17 人のパレスチナ人が死亡し、^{[48][49]}、ガザとの境界で[パレスチナ人の帰還権](#)を求める行進中にイスラエル軍の銃撃により 1,400 人以上が負傷した。^[50]

参照

-  [パレスチナポータル](#)
-  [イスラエルポータル](#)
- [2011 年イスラエル国境デモ](#)
- [イスラエル・パレスチナ紛争における家屋破壊](#)
- [パレスチナ人民との国際連帯の日](#)
- [ケーニッヒ覚書](#)
- [ナクバの日](#)
- [2000 年 10 月の出来事](#)

参考文献

1. [^ジャンプアップ:ab](#) エンデルマン、1997 年、292 ページ。
2. [^ジャンプアップ:abc](#) Levy and Weiss、2002 年、200 ページ。
3. [^ジャンプアップ:ab](#) ジャック・クーリ、ヨアブ・スターン (2008 年 6 月 15 日)。[「イスラエルのアラブ指導者、土地の日で「イスラエルの『台頭するファシズム』と戦う」](#)」。[「ハアレツ」](#)。
4. [^ジャンプアップ:abcdefgh](#) オルリー・ハルパーン (2006 年 3 月 30 日)。[「イスラエルのアラブ人が土地の日を祝う」](#)。エルサレム・ポスト、英語オンライン版 2006 年 11 月 1 日閲覧。
5. [^ジャンプアップ:ab](#) バイマン、2002 年、132 ページ。
6. [^ジャンプアップ:ab](#) [「Remembering Land Day」](#)。BBC ニュース。2001 年 3 月 30 日。2006 年 11 月 1 日に閲覧。
7. [^](#) Lappin, Yaakov (2008 年 3 月 30 日)。[「数千人のアラブ人が土地の日を祝う」](#) エルサレム・ポスト 2011 年 9 月 16 日時点の[オリジナル](#)よりアーカイブ。
8. [^ジャンプアップ:ab](#) マタール、ディナ (2011)。[パレスチナ人であることの意味：パレスチナ人の物語](#)。IB タウリス。pp.128–129. doi : 10.5040/9780755610891. ISBN [978-0-7556-1460-8](#)。
9. [^](#) シュルツとハマー、2003 年、77 ページ。
10. [^ジャンプアップ:ab](#) キング・イラニ、ローリー (2000 年秋)。[「ガリラヤにおける土地、アイデンティティ、抵抗の限界」](#)。中東レポート。第 216 号、地盤沈下？環境と空間の政治。2001 年 1 月 8 日時点のオリジナルより[アーカイブ](#)。2024 年 3 月 24 日閲覧。
11. [^](#) ハーブとカプラン、1999 年、260 ページ。「[...] イスラエルにおけるアラブ人のアイデンティティの地理的規模は、20 世紀の間に何度か劇的に変化しました。1948 年の悲惨な敗北以前は、彼らは徐々に国民意識を築きつつあった農業パレスチナ社会の不可欠な一部でした。」
12. [^](#) カバ、ムスタファ。「イギリス委任統治領時代のパレスチナ人における地域パレスチナ主義と汎アラブ民族主義の間：アクラム・ズアイテルを例に。」マイケル・J・コーエン編著『パレスチナにおけるイギリス委任統治：1920～2020 年百年祭』、65～82 ページ。ラウトレッジ、2020 年。「第一次世界大戦後のパレスチナの人口は 70 万人で、そのうち 64 万 2 千人がアラブ人だった。アラブ人の 70%は農民、22%は都市住民、8%はベドウィンだった」(70 ページ)。
13. [^](#) スタイン、ケネス・W.「シオニストによる土地買収：イスラエル建国の核心要素」マイケル・J・コーエン編著『パレスチナにおける英国委任統治：1920～2020 年百年祭』、189～204 ページ。ラウトレッジ、2020 年。「1931 年のパレスチナ国勢調査の統計によると、アラブ人の 85%が農村部門に従事しており、土地の売買がパレスチナのアラブ人人口のかなりの部分に直接的な幸福に影響を与える可能性があることを意味していた」(194 ページ)。
14. [^](#) Nassar and Heacock, 1990, p. 29. 1967 年の戦争後、パレスチナ人の間で生まれた人気

のスローガンは、*al-Ard qabl al'Ard*（「名誉よりも土地」）であった。

15. [^ジャンプアップ:ab](#) ユリ・デイビス。[「すべての国民と難民のための民主国家」](#)。MidEast Journal 2001、2001年6月25日、Ha'aretz 紙に掲載されたオリジナルの要約版[オリジナル](#)。
16. [^](#) Salman Abu Sitta、Masalha and Said、2005年、287ページ、脚注33。Sitta はまた、土地収用以前にアラブ系市民が所有していた土地の総面積を 1,400 平方キロメートル（540 平方マイル）と推定している。この総面積の半分、約 700 平方キロメートル（270 平方マイル）は、1960 年代初頭までに収用されていた。
17. [^ジャンプアップ:abc](#) イフタチェル、2006年、170ページ。
18. [^](#) ペイズ、2005年、7ページ。
19. [^](#) [土地の日](#)を神話から[脱却する\[盗用\]](#)エルサレムポスト
20. [^](#) イフタチェル、2006年、69ページ。
21. [^ジャンプアップ:ab](#) [Nayef Hawatmeh](#) (2005年4月7日~13日)。[「Remembering Land Day」](#)。Al-Ahram Weekly Online。2006年10月29日時点の[オリジナル](#)年11月1日閲覧。
22. [^ジャンプアップ:ab](#) Holzman-Gazit、2007年、140ページ。
23. [^ジャンプアップ:abc](#) マクトウォール、1990年、157-158ページ。
24. [^](#) キマーリングとミグダル、1993年、178ページ。
25. [^](#) [パペ、イラン](#) (2011)「忘れられたパレスチナ人：イスラエルにおけるパレスチナ人の歴史」[イエール](#)大学。ISBN [978-0-300-13441-4](#)。pp.130,131
26. [^ジャンプアップ:abcd](#) Abdo と Lentin、2002年、139ページ。
27. [^](#) フランケル、1988年、40ページ。
28. [^](#) 国際ユダヤ人平和連合 (IJPU)、1987年、26ページ。
29. [^](#) [「戦後：アラブの攻撃は占領地域でのみ行われた」](#)。[ニューヨーク・タイムズ](#)。1991年3月31日。2006年2月1日閲覧。
30. [^](#) [HaLevi, Ezra](#) (2006年3月31日)。[「イスラエルのアラブ人がロッドで『土地の日』を祝い、ハマスの旗を振る」](#)。[Arutz Sheva](#)。2022年3月30日閲覧。
31. [^](#) ヨセフ・ゴエル (2001年3月26日)。[「土地の日？ いや、嘘の日と呼ぼう」](#)[「エルサレム・ポスト」](#)。2007年4月5日時点の[オリジナル](#)よりアーカイブ。
32. [^ジャンプアップ:ab](#) イスラエル国司法当局。[「イスラエル国司法当局：調査委員会」](#)（ヘブライ語）。2009年3月2日時点の[オリジナル](#)。2009年7月30日閲覧。
33. [^ジャンプアップ:abcd](#) キマーリングとミグダル (2006年)、196ページ。
34. [^ジャンプアップ:ab](#) Bar-Tal と Teichman、2005年、153-154ページ。
35. [^](#) [「土地の日の前夜、イスラエルは侵略を続ける」](#)。国際プレスセンター、パレスチナ。2006年5月9日。2006年8月28日時点の[オリジナル](#)よりアーカイブ。2007年5月28日閲覧。
36. [^](#) エルサレム・ポスト社説 (2014年4月2日)。[「Lackluster Land Day」](#)。エルサレム・ポスト。2014年4月2日閲覧。

37. [^][ジャンプアップ:abcde](#) 「中東で言葉の戦争が勃発し、パレスチナ人 5 人が死亡」。Mid-East Realities。2001 年 3 月 30 日 年 8 月 1 日閲覧。
38. [^][フランス通信社 \(2002 年 3 月 30 日\)。「イスラエルのアラブ人が「土地の日」にアラファト包囲に抗議」](#)。Common Dreams News Center。2006 年 10 月 19 日時点の[オリジナルよりアーカイブ](#)。2006 年 11 月 1 日閲覧。
39. [^][「イスラエルのアラブ団体が土地の日を祝う」](#) BBC [ニュース](#) 2005 年 3 月 30 日 2009 年 8 月 1 日閲覧。
40. [^][「パレスチナ人、立ち退きに抗議」](#) アルジャジーラ[英語版](#) 2008 年 3 月 28 日 2009 年 8 月 1 日閲覧。
41. [^][「プレスリリース：パレスチナ土地の日 2006」](#)。BADIL パレスチナ居住および難民の権利リソースセンター。2006 年 3 月 30 日。2006 年 4 月 15 日時点の[オリジナルよりアーカイブ](#)。2006 年 3 月 30 日閲覧。
42. [^][「土地の日抗議: パレスチナ女性グループがエルサレムのダマスカス門で集会」](#)。オルタナティブ情報センター。2009 年 3 月 30 日。 2009 年 10 月 12 日時点の[オリジナルよりアーカイブ](#)。2009 年 8 月 1 日閲覧。
43. [^][ジャンプアップ:ab](#) シャロン・ロフ＝オフィール (2009 年 3 月 30 日)。「[土地の日におけるアラブ指導者：我々は権利を恐れない](#)」。Ynetnews。2009 年 8 月 1 日閲覧。
44. [^][Sameh A. Habeeb \(2009 年 3 月 30 日\)。「The Palestine Telegraph」](#)。2009 年 8 月 1 日閲覧。
45. [^][「イスラエル、土地の日抗議のためヨルダン川西岸地区を封鎖」](#) CBC [ニュース](#)、2012 年 3 月 30 日。
46. [^][ガイ・アズリエル \(2012 年 3 月 30 日\)。「イスラエル軍、土地記念日にパレスチナの抗議者と衝突」](#) CNN。
47. [^][ジャンプアップ:ab](#) 「イスラエル軍が土地記念日の行進者と衝突、パレスチナ人 1 人が死亡、数十人が負傷」。[アルアラビーヤ](#)。2012 年 3 月 30 日。
48. [^][「ハマス、ガザ国境衝突で死亡した 5 人はハマスのメンバーだと主張」](#) Ynetnews 2018 年 3 月 31 日 2018 年 3 月 31 日閲覧。
49. [^][「ハマス、金曜日の国境での暴力で死亡したガザ人 16 人の中に武装勢力 5 人が含まれていたと認める」](#)。[タイムズ・オブ・イスラエル](#)。2018 年 3 月 31 日。2018 年 4 月 1 日閲覧。
50. [^][「イスラエル軍、ガザ抗議活動でパレスチナ人 17 人を殺害」](#) [www.aljazeera.com](#)。

文献

- アブド、ナフラ; レンティン、ロニット (2002)。[女性と軍事対立の政治: パレスチナとイスラエルのジェンダー化された移住の物語](#)。ベルガンブックス。ISBN 978-1-57181-498-2 (10)。
- バータル、ダニエル、タイヒマン、ヨナ (2005 年)。[『紛争におけるステレオタイプと偏見：イスラエルのユダヤ人社会におけるアラブ人の表現』](#) (図解、再版)。ケンブリッジ大学出版局。ISBN 978-0-521-80797-5。
- バイマン、ダニエル (2002 年)。[『平和の維持：民族紛争への永続的な解決策』](#) JHU Press。ISBN 978-

[0-8018-6804-7](#)。

- エンデルマン、トッド・M (1997 年)。[ユダヤ人社会の比較](#) (イラスト版)。ミシガン大学出版局。[ISBN 978-0-472-06592-9](#)。
- フランケル、ウィリアム (1988 年)。[ユダヤ人問題調査](#)。フェアリー・ディキンソン大学出版。[ISBN 978-0-8386-3343-4](#)。
- 国際ユダヤ人平和連合 (IJPU) (1987)。イスラエルとパレスチナの政治レポート(第 130 版 - 第 147 版)。Magelan SARL
- ハーブ、グントラム・ヘンリック; カプラン、デイビッド・H. (1999)。『ネストされたアイデンティティ：ナショナリズム、領土、規模 (イラスト版)』。ロウマン&リトルフィールド。[ISBN 978-0-8476-8467-0](#) (10)。
- ホルツマン・ガジット、イファット (2007 年)。[イスラエルにおける土地収用：法律、文化、社会](#)。アッシュゲート出版、[ISBN 978-0-7546-2543-8](#) (10)。
- キマーリング、バルーク; ミグダル、ジョエル S. (1993)。[パレスチナ人：民族の形成](#) (イラスト版)。フリープレス。[ISBN 978-0-02-917321-3](#) (10)。
- [キマーリング、バルーク](#)、ミグダル、ジョエル S. (2003)。[パレスチナ人：歴史](#) (イラスト版)。ハーバード大学出版局。[ISBN 978-0-674-01129-8](#) (10)。
- レヴィ、ダニエル、ワイズ、イファット (2002)。[民族市民権への挑戦：移民に関するドイツとイスラエルの視点](#) (イラスト版)。ベルガンブックス。[ISBN 978-1-57181-292-6](#)。
- マクトウォール、デイヴィッド (1990 年)。[『パレスチナとイスラエル：蜂起とその先』](#) (図解入り、再版)。IB タウリス。[ISBN 978-1-85043-289-0](#) (10)。
- [マサラ、ヌール; サイド、エドワード W.](#) (2005)。ヌール・マサラ (編)。大惨事の記憶：パレスチナ、イスラエル、国内難民：エドワード W. サイド (1935-2003) を偲んでのエッセイ集。ゼット・ブックス。[ISBN 978-1-84277-623-0](#) (10)。
- ペイズ、シャニー (2005)。[イスラエルのパレスチナ NGO：市民社会の政治](#) (イラスト版)。IB タウリス。[ISBN 978-1-85043-630-0](#)。
- ナサール、ジャマル・ラジ、ヒーコック、ロジャー (1990 年)。[『インティファダ：岐路に立つパレスチナ』](#) (イラスト版)。グリーンウッド出版グループ。[ISBN 978-0-275-93411-8](#)。
- シュルツ、ヘレナ・リンドホルム、ハンマー、ジュリアン (2003 年)。パレスチナ人ディアスポラ：アイデンティティの形成と祖国の政治 (注釈版)。ラウトレッジ。[ISBN 978-0-415-26820-2](#)。
- ソレク、タミール (2015 年)。[イスラエルにおけるパレスチナ人の追悼：暦、記念碑、殉教者](#)。スタンフォード、カリフォルニア州：スタンフォード大学出版局。[ISBN 9780804795180](#)。
- [イフタチェル、オーレン](#) (2006 年)。[『民族政治：イスラエル/パレスチナにおける土地とアイデンティティ政治』](#) (イラスト版)。ペンシルバニア大学出版局。[ISBN 978-0-8122-3927-0](#)。